

題目：公正判断の偏りに関する実験的研究

氏名：胡 一逾

指導教官：亀田 達也

本研究の大きな問いは、人が何の基準を基づいて、分配政策や分配システムの良さを評価するのかを調べることにある。この問題に対する回答について公正を重要な要因として挙げられる。ある提案や政策を公正と知覚すれば、決定に対する受容や満足といった短期的効果が生み出すだけではなく、組織への評価やコミットメントなどの長期的効果も増加させることも見られる。

公正は手続きによって規定されるという考え方がある (Lind & Tyler, 1988)。手続き的公正は、決定プロセスにして知覚される公正さである (Thibaut & Walker, 1975)。Thibautらの研究知見によれば、手続きが公正であれば、結果がいかにかかわらず、決定に対する満足度を向上させることは示された。

一方、人が個人の利害や思想的先入観を抑制することが難しい。それによって、分配結果の影響を受けずに手続きの公正さを評価することも難しいだろう。一連の研究によれば、利益の大きい結果をもたらす手続きを適切と知覚し、利益が過少する結果をもたらす手続きを不適切と知覚するという知覚の偏りが見られた。

ただし、人は「当事者」と「第三者」という異なった立場から分配行動を評価するとき、行動の差異が見られた (田中, 1988)。そこで、本研究の第一の目的は、人は第三者として結果の影響を受けずに手続きの公正さを評価することができるのかについて検討することである。そのために、質問紙調査を行った。

質問紙のシナリオは面識のない二人にお金を分配する立場にある A 君に関わるエピソードである。A 君は自ら出金する立場ではなく、単なる決定者である。実験参加者は文章を読み、手続きが公正である A 君の分配判断を評価する。その結果、異なる結果の間、A 君に対する評価に有意差が見られた。この結果から、人は第三者としても手続きの公正さを評価するときに結果に影響されることが示された。また、基礎条件に比較して結果良条件において A 君への評価が有意に高かったが、結果悪条件において A 君への評価に有意差がなかった。この結果から、人は第三者として手続きを評価するときに、良い結果に影響される一方、悪い結果からの影響を抑制できることを判明した。

また、手続き的公正以外に人は衡平原理と平等原理などの分配基準に基づいて分配方法を評価することも判明された。本研究の第二の目的は、異なる分配選好の人は結果の影響を受けずに手続きの公正さを評価することができるのかを検討することである。

その結果、第三者として、衡平原理の人は結果の影響を受けずに手続きの公正さを評価することができる一方、平等原理の人はできないことが判明された。

上述の二つの結果は、分配政策に対する評価は、たとえ評価者が第三者の立場であっても、結果の影響を受けるということを示した。また、人の分配選好などの個人内要因も評価に作用することを判明した。それらの結果によって、人が何の分配政策を正しく、公正と判断するかということは、個人利益と関連なく、社会における人のさまざまな思考、認知、感情を問題にせざるを得ない。